

令和3年度第2回越谷市科学技術体験センター運営委員会

- 日時 令和3年11月9日(火) 13時30分～15時30分
- 場所 越谷市科学技術体験センター 1階工作室1
- 出席者 (委員9名) 手嶋委員長、井原副委員長、林委員、市村委員、上野委員、柳委員、池田委員、大塚委員
(事務局7名) 木村生涯学習課長
前田生涯学習課調整幹兼科学技術体験センター所長
浅古主幹、中村主幹、小高主任指導主事、島村主事、児玉主事
- 欠席者 (委員2名) 金子委員、鈴木委員
- 内容 下記のとおり

会議内容

令和3年度第2回運営委員会会議録(令和3年11月9日開催)

1 開会 司会：前田生涯学習課調整幹兼科学技術体験センター所長

2 あいさつ 手嶋委員長

3 報告事項

(1) 令和3年度(4月～9月)事業報告について

議長 令和3年度(4月～9月)事業報告についての説明を求める。

事務局 令和3年度(4月～9月)事業報告の資料に基づいて説明を行う。

議長 委員に諮る。

委員 学校利用事業のメニューごとの体験人数を比較すると、「ブラックスライム」は体験者数が多いが「紙を使って」については体験者数が0人となっている。このことについて、どのように分析をしているのか。

事務局 「ブラックスライムを作ろう」は、磁石の特性や化学変化など、一つのメニューで様々な要素を体験しながら学ぶことができる人気のメニューとなっている。メニューの選択は、受講する児童たちの希望のほか、担任の先生の意向が反映される。「紙を使って」については、「ブラックスライムを作ろう」と比べると魅力に欠けた一面があったのかもしれない。しかし、10月以降の実施校では、「紙を使って」の希望がすでに数件入っており、少なからず興味を持っていただくことはできている

と感じる。何が原因でメニューの選択に偏りが出てしまっているのか、魅力の伝え方など今後も分析を続け、改善を図っていきたい。

委員 特別な支援を要する児童生徒を対象とした科学工作体験事業について、この半年間では体験人数が0人であったが、過去に事業を実施した実績があるのか。また、どんなことを行っているのか。

事務局 学校からミラクルに来館し体験するタイプの事業となっている。
今年度は感染症の影響で8月まで事業を一時的に中止しており、9月から受付を再開したところであることに加え、昨年も1年間受け入れを中止していた。そのため、実績としては一昨年の9月から翌年2月までのものとなる。
実施内容としては、最後に成功体験で終わることのできる「キラキラ万華鏡を作ろう」が人気であった。体験当日までには、工作のための道具や材料の準備や指導内容等、じっくりと検討を行い実施している。
体験後の反響としては、まず実際に体験できること、科学と結びついた体験ができること、そして成功体験で終わられるといったことが、とても好評をいただいているところである。

委員 コロナ禍で人が集まるのが難しい状況の中、展示を行っていたようだが、企画展開催時の来館者の年齢層としては、若年層が多かったのか、それとも高齢者層が多かったのか。

事務局 感染症の影響で体験装置の利用ができないため、企画展示の実施をしてきた。これまでは、若年層が主な来館者の層であったが、企画展示中は、高齢者層も多数来館されていた。宮沢賢治は幅広い世代にわたって関心のあるテーマであり、普段は来館しない方が企画展をきっかけとして来館し、企画展の内容に留まらず、当センターのコンテンツをご覧いただくことができたため、大変有意義な事業となったのではないかと感じている。

委員 SDGs展も行っていたが、展示を見ても内容が大変難しく、理解するのが大変だと感じた。展示資料はあるが、直接、口頭で解説してくれる解説員はいなかった。そのあたりの来館者からの感想はどうであったのか。

事務局 展示は、小学校高学年以上を対象として想定し、作成した。しかし、ミラクルにはそれよりも年齢の低いお子様も多く来館される。展示の解説員の設置はせず、館としての展示物の説明が足りなかった部分もあるかと思うが、SDGsの企画展については、親子連れで親が子に説明しながら展示を見ている光景を目にすることが多かった。また、ミラクルからの50の提案リーフレットを作成、大変な好評をいただいた。市内小中学校の児童生徒すべてにリーフレットを配布し、夏の課題として取り組んでいた。そのことから、若年層のお客様についても、ある程度対応できていたのではないかと考える。

(2) 令和4年度事業計画(案)について

- 議長 令和4年度事業計画(案)についての説明を求める。
- 事務局 令和4年度事業計画(案)の資料に基づいて説明を行う。
- 議長 委員に諮る。
- 委員 サイエンスボランティアセンターについて、具体的にどのような活動を考えているのか。
- 事務局 サイエンスボランティアは、年間を通して希望者を受け付けている。活動内容としては大きく2つに分かれており、1つは講師として科学講座を開催するもの、もう一つは講座を開催する際にスタッフとしてご協力いただくものとなる。
- 昨年度に引き続き、極力スタッフの数を減らして密を避けようという目的から、サイエンスボランティアの方にご協力を依頼するのは自粛させていただいている状況である。また、講師としてお越しいただくものについても、感染症の影響で条件が絞られることから、かなり限定的な活動となってしまっている。そのような中でも、春日部高校の中村先生の実験教室、大人のための身近な生物学講座など、できる範囲で可能な限り実施しているところである。
- 来年度、コロナの状況が落ち着き、積極的なボランティア活動が可能となった場合には、ボランティアの方にご協力をいただき、事業を実施していきたいと考えている。
- 委員 会議資料には「ジュニアボランティアの育成」という記載があるがこういった形で行うのか。
- 事務局 ジュニアボランティアという定義はないが、例えば、春日部高校や越谷総合技術高校の生徒の方が講座のお手伝いでボランティア的な役割でお越しいただいている。教育的な観点から、科学講座でのボランティア活動を通してよりよい人材を育成していくことができたらと考えている。
- 委員 現在、小学生などは学校利用事業等で積極的に関わりがあるが、高校生・大学生の科学技術への関わりが非常に少ないと感じている。高校生・大学生に向けたアプローチが可能かどうか、本日お越しいただいている高校・大学の先生方にお伺いしたい。
- 議長 私見ではあるが、教育学部に理科専修があり、以前はボランティア活動も行っていた。現在は、コロナの影響で動けないことから活動を見合わせている。学生ボランティアとして学校に出向いたりもしていたので、生涯学習の観点や学生自身の勉強のためにも、こういった場所でもボランティア活動をしてもらいたい。

学業のこともあるので、ボランティア活動のタイミングやコロナの状況を見つつ、それらの問題がクリアになれば、追々進めていきたいと考えている。

委員 越谷総合技術高校では、今年度は3講座で科学技術体験センターと事業協力をしている。生徒が外へ出て色々な方と接することは、社会性を身に着けるために有効であり、非常に大切なことである。

また、小さな子供たちからしても、少し年上のお兄さんお姉さんから教えてもらえるということがうれしいのではないかと。こういった機会があるのはありがたい。

例年、2月に科学技術体験センターへ生徒が企業実習に訪れているが、今年度はコロナのため中止している。コロナ収束後は、また以前のように実習を依頼したいと考えている。

委員 最近では地震が多く、災害に対する危機感が高まっている。

災害に関する科学講座がないようなので、前に運営委員会で見つけた土石流のメカニズムを見せる実験を講座で実施するのはどうか。災害対策など、科学の力でしかできないこともあるはずだと思うので、そういった企画を考えてほしい。

特に年齢が高い世代は、災害対策に興味を持っているので、科学的な専門知識のある方に教えていただきたい。

議長 一昨年、台風などの自然災害が続いた年だったので、そういった話があった。災害対策の講座については、街づくりや共助、SDGsの観点から言及するのもいい。SDGsは世の中の問題点に目を向けるきっかけになるものなので、取り入れてほしい。防災は今や他人事でなくなっている。日本は自然災害の多い国であるので、防災意識と科学を結び付けるのもいいのかもしれない。

委員 特別な支援を要する児童生徒を対象にした科学工作体験事業について、特別支援学級の子供や体の不自由な子、落ち着きのない子に対して、工夫や配慮などどのようにしているのか聞きたい。

事務局 事前に支援学校の先生と綿密な打ち合わせを行い、どのような障害を抱えているのかなど詳しく聞き、児童・生徒の状況の把握を行っている。それを踏まえ、さまざまな障害の種類によって、その子に合わせた内容で対応をしている。

実際に対応する科学教育指導員は、元教員であるため、そういったお子さんに対してもきめ細かな対応をすることができている。例えば、あいまいな言葉ではなくわかりやすい言葉を使う、言葉だけの理解が難しい子に対しては、目で見て理解できるような掲示物を作成する、その子が使いやすい道具の選定を行うなど、内部で検討しながら事業を実施している。

委員 大学生向けの科学啓発指導法講座について、市内に限らず、都内や近隣の学校でも実施可能なのか。

- 事務局 基本は市内の大学を対象としているが、要望があれば、市外の学校にも積極的に出向いて対応していきたい。
- 委員 小学校低学年向けのプログラミング講座について、桜井小学校でも今年度実施の予定があり、校長先生も楽しみにされている。そんな中、校長先生が、授業を受けた子供たちから「次はいつできるの」と聞かれるのではと気にされていたのだが、市内小学校は全30校ある中、来年度のプログラミング講座の実施予定は10校となっている。実施予定数が少ないので、今年度講座を受けてしまうと来年度は受けることができないのか、それとも希望があれば来年度もう一度受けることが可能であるのか聞きたい。
- 事務局 目安が10校ということなので、必ずしも10校しか実施しないというわけではなく、それ以上の受付も可能である。学校利用事業との日程のやりくりをうまく行いながら、なるべく多くの学校に出向いて授業を行いたいと考えている。
また、今年度の実施校は5校から6校に増える見込みである。そのうち、4校は小学2年生を対象としているが、蒲生小学校と蒲生第二小学校の2校については、小学校1年生も希望があったため2学年に向けて授業を行う予定である。先日、新方小学校で事前に行ったプレ授業では好評だった。こちらの事業については、当センターの特色ある事業にも位置付けられているため、今後とも事業を推進していきたい。
- 委員 生物や地学をテーマとした事業も実施を検討しているとの話であったが、そういったテーマの講座を市内の川など、野外で生き物や石を観察する形で講座を実施するということは検討可能か。
- 事務局 検討可能である。来年度はまだ着手していないが、センターの目の前が公園という立地もあり、野外での活動といったこともうまく活用していきたいと考えている。
立教大学では、野外でのアリの観察を通して科学の知識を深めていく事業が行われており、その事業について詳しく調べようと考えている。
- 委員 企画展示や催し物をどのようにPRしていくのか。最近、若者は雑誌を読まないなど、情報入手の手段に偏りがあるという。そういったことを踏まえ、これから先、より多くの人へ情報を発信するためにはどういった方法でのPRを考えているのか。
- 事務局 PR手段については、越谷市全体の課題となっている。様々なメディアを通して知っていただけるよう、当センターでは、記者クラブへの記事の投げ込みや、市内登録者に直接情報提供することのできるシティーメールの活用、ホームページ上のお知らせを見やすく改善するなどの対策を取っている。
- 委員 近隣の市町村へのPRはどのように行っているのか。
- 事務局 近隣の市町村については、記者クラブへの投げ込みにより、新聞記事や新聞社のネット記事として取り上げていただくといったことを活用していきたい。

実例として、宮沢賢治展では新聞に取り上げられたことをきっかけに岩手県などの県外からも多く来館いただいたことがある。SDG s 展についても同様である。

今後も引き続き、様々なPR方法を活用しながら、市内だけではなくより多くの方にお越しいただけるよう努力していきたいと考えている。

委員 大学生向けにPRするという部分で、学生ボランティアに企画の余地があるのであれば、大学生自身にアイデアを募るのもよいのではないか。どのようにすれば大学生に情報が伝わるのか、学生のアイデアはたくさん出てくるので、そういった方法も検討してみてもいいのではないか。

委員 指導主事が学校を訪問して授業を行うことは、これまでなかったのか。

事務局 コロナ前までは、小学校3年生・5年生と、中学校1年生がミラクルの実験室などを使って体験していた。コロナを機に事業を継続するための方法を検討した結果、昨年度からはミラクルで来てもらうのを待っているのではなく、ミラクルから職員を派遣する形へ移行することとなった。

委員 素晴らしいことである。派遣のための費用はかからないのか。

事務局 コロナ前までは、児童・生徒が当センターへ来館するためにバスを借り上げて利用しており、その借り上げ費用を当センターで負担していた。職員を派遣する方法に切り替えたことで、バスの借り上げ費用が丸ごとなくなったことから、コロナ禍の厳しい財政状況の中で、市に貢献することができたものと自負している。

委員 図書館などに催し物のポスターを掲示することはできないのか。

事務局 企画展のポスターやチラシなどは、図書館を含めた市内各施設・小中学校に配布し掲出の依頼をしている。

議長 企画展のチラシは大学にも届いており、興味のある学生に勧めたりしている。

4 その他

事務局 科学技術体験センターの特色ある取り組みの報告

議事終了

5 閉会